

久留米入城400年記念
京町校区の見どころ知りどころ
第5回 坂本繁二郎生家

坂本繁二郎生家は、日本の近代美術を代表する洋画家が生まれたことで知られるとともに、久留米市内に唯一残る武家屋敷として、市の文化財に指定されています。

連載の第5回は、坂本生家の修理・復原について紹介します。

話し手の古賀正美さん（元文化財保護課職員）は在職中、坂本生家について、保存活動から、平成18〜21年度の修理・復原工事、一般公開まで、長く深く関わりました。当時を振り返り、その思いを聞きます。

Q. 坂本生家の復原の方針は？

（古賀）家屋は、繁二郎が20歳、明治35年（1902）頃の姿に戻すことにし、建物だけでなく敷地の広さや配置も復原しました。

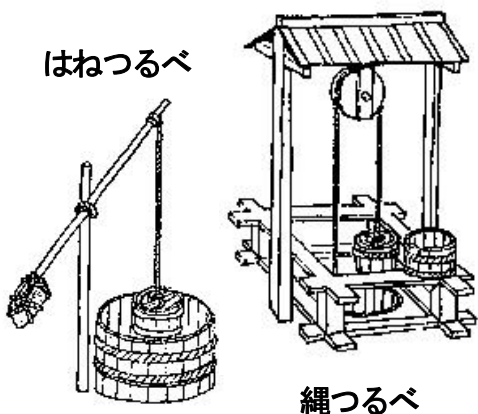
敷地は約450坪（約1490㎡）、木造2階建ての間取りは、今でいう13Kです。久留米藩の中級藩士の

生活空間を体感できるスポットになりました。

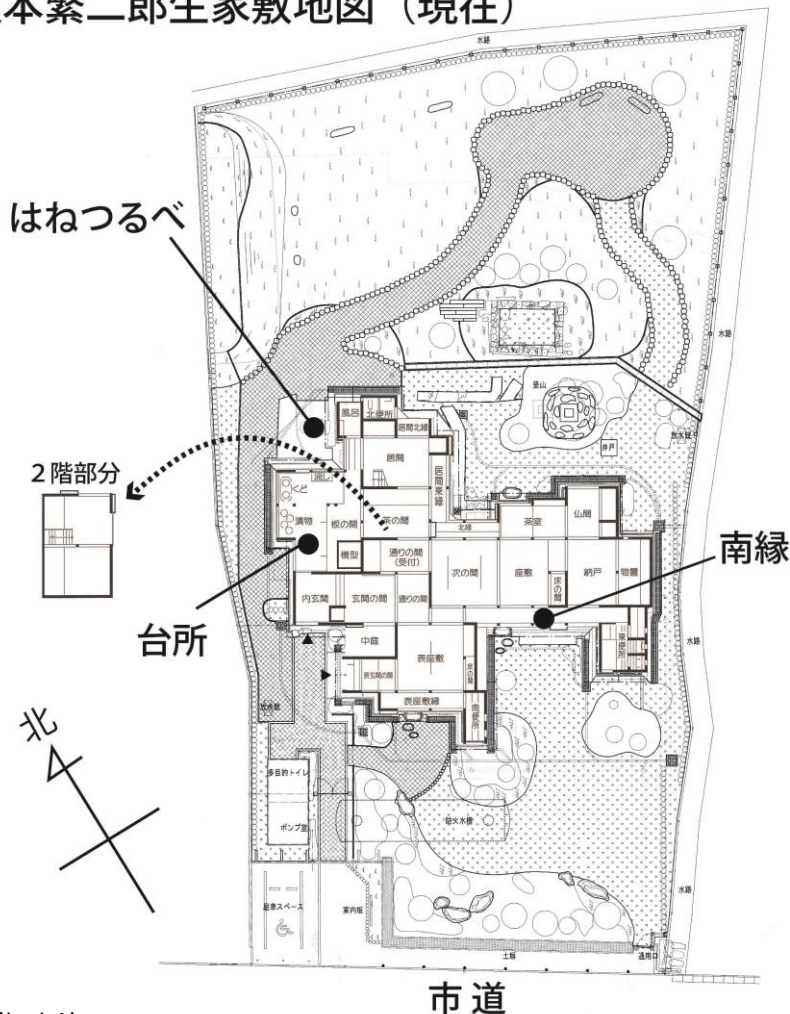
Q. 復原を行う中で、印象に残っていることは？

（古賀）井戸の仕組みは、当初、縄をつけた桶を滑車で上げ下げする「縄つるべ」で復原する計画でしたが、ところが、ちょうど坂本家の古い写真が発見されて、「はねつるべ」が写っていました。石の重みで水を汲む仕組みです。現在、台所から庭に出ると、復原した「はねつるべ」の井戸を見ることが出来ます。

また、台所の土壁は、平成21年度に、京町小学校の児童と一緒に塗って復原しました。もう成人された頃でしょうか。



坂本繁二郎生家敷地図（現在）



Q. 坂本繁二郎生家の見どころ知りどころは？

（古賀）文化財は、本来の部材を残しながら修理します。劣化しているも、その部分だけ取り除き、継手（つぎて）をして残す工夫をしています。南縁の柱がそうですね。木目もキズも、多くは坂本家の人々が過ごした当時のまま残ります。

そうした痕跡を見て触って、江戸時代の人々の暮らしや、現代の私たちの家との違いなどを感じてほしいです。

家は人が出入りして使って、どんどん新しい風が通り抜けていくことで、長く残っていくものだと思います。

（聞き手・市文化財保護課 穴井）